

# 秩序としづけさ

暦本 純一

プロフィール  
1961年東京都生まれ。情報科学者。東京大学大学院情報学環教授、ソニーコンピュータサイエンス研究所フェロー、副所長。2020年4月に開設されるソニーCSL京都のディレクターに就任。Urban Automation（人間拡張）、人間とAIの能力がネットワークを越え相互接続・進化していく（Network of Abilities）の研究を推進。著書に、オーガメンテッド・ヒューマン（エヌ・ティー・エス）などがある。

梅棹忠夫の『知的生産の技術』を最初に読んだのは高校に上がる直前の春休みだったと思う。父の本棚からその岩波新書を発見し、すっかりかぶれてしまい、高校の授業に京大型カードを持ち込んでノート代わりにしたり、大学でもカードで研究メモをとったりしていた。

その後、研究者となった私は、コンピュータと人間のインターフェースの研究を進めていた。そのときも知的生産の技術はどこかで心の中にあつた。一九九一年に、情報科学の研究者マーク・ワイザーが、「二世紀のコンピュータ」という論文を発表し大きな反響を呼んだ。この論文は、大型計算機からパーソナルコンピュータへと進化したコンピュータがユビキタスに、つまり実世界の至るところにコンピュータが遍在するようになるというビジョンを示したもので、次のような文で始まっている。

「もつとも深淵な技術はみえなくなる。それ自身身が日常生活と不可分になるまで、その一部に編み込まれていく。」

（マーク・ワイザー「二世紀のコンピュータ」）

ところが、ワイザーのこのビジョンは、コンピュータがただ沢山あるような世界だと表面的に解釈されてしまい、そういう技術展示なども多くつくられる

ようになってしまった。それを気にしてか、ワイザーはユビキタスという用語から「Calm Technology（静かな技術）」という表現を使うようになる。技術の静けさ。技術が生活の中に静かに溶け込み、その機能を享受できる状態。おなじころ、何気なく『知的生産の技術』を読み返してつぎの記述があるのに気づき驚いた。ワイザーのいう静かな技術を二〇年以上も前に予見しているように思えたからだ。

「知的生産の技術の話全体が、能率の問題としてうけとられやすいのである。しかし、じつさ いをいうと、こういう話は能率とは無関係ではないにしても、すこしべつのことかもしれない。（中略）整理や事務のシステムをととのえるのは、『時間』がほしいからではなく、生活の『秩序としづけさ』がほしいからである。」

（梅棹忠夫『知的生産の技術』）

ユビキタスコンピューティングは最近ではIoTと呼ばれるようになり、ITが至るところに組み込まれ生活の利便性を向上させる「スマートシティ」の提案も盛んである。スマートで便利で効率的な都市。だが、それだけでそこに住みたいだろうか？ 効率の追求にとどまらない、梅棹、あるいはワイザーが示した秩序としづけさが保たれる世界をめざしていきたい。

〇〇してみました世界のフィールド

環境・消費について考える  
——マドリードの一市民として  
折井 善果

12 みんなくInformation

14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
籠だけじゃない  
上羽 陽子

16 みんなく回遊  
台所  
大澤 由実

18 シネ倶楽部 M

ようやくあらわれた、自己批判の芽  
——「ガサの美容室」  
菅瀬 晶子

20 ことばの迷い道

世界でいちばん(?) 複雑な声調体系をもつ言語  
内原 洋人

21 次号予告・編集後記

1 エッセイ 千字文

秩序としづけさ  
暦本 純一

## 特集 知的生産のフロンティア

2 知的生産のフロンティアへようこそ  
小長谷 有紀

4 梅棹忠夫アーカイブズのねらい  
久保 正敏

5 今日の知的生産の手法  
堀 正岳

6 カラコラム・ヒンズークシ学術探検と知的生産  
子島 進

7 東南アジア学術調査  
——梅棹忠夫の「移動研究室」  
信田 敏宏

8 ウメサオの霧箱  
——探検的思考のための装置  
高野 明彦

月刊

みんなく

4月号目次